

教会成長研究院

サンクチュアリ教会を支持する人々の言説の誤り (1)

二〇一五年七月二十八日付で、日本統一教会（現、家庭連合）元会長の江利川安樂氏が「退会届」を郵送してきました。そこには、文亨進様を中心とした米国のサンクチュアリ教会の下で、日本サンクチュアリ教会総会長兼協会長として出発するとありました。
 サンクチュアリ教会は、真のお父様のみ言と伝統が真のお母様によって覆されていると主張し、お母様のなさることをことごとく否定しています。これらの主張は、お父様がお母様と共に立ててこられた勝利圏を否定するものであり、真の父母様を中心とする統一家の一体化を損ねるものです。以下、サンクチュアリ教会を支持する人々の言説の誤りを指摘します。
 なお、誌面の都合上、文字数の制限があるために、より詳しくは「真の父母様宣布文サイト (http://trueparents.jp)」をのぞいてください。(教会成長研究院)

注・本文中、真の父母様のみ言は「青色」で色分けしています。

サンクチュアリ教会を支持する人物である李鎬宅氏（二万双、イ・ホクテック）が、天正宮博物館で六年勤務）が、二〇一五年七月十四日に「摂理的同時性からみた危機的状況とその対策」という動画を公開しました。その動画で彼は、亨進様を中心に祝福家庭が一つとなって摂理を進めていくようにしなければ世界に危機が訪れると主張しています。

李鎬宅氏はみ言中心主義を装っていますが、その言説には誤りが多く含まれています。
 (1) 李鎬宅氏の言説「アブラハム、イサク、ヤコブ路程を歩むのが真のお父様である。その後ヨセフ路程を歩むのが亨進様であり、さらにエフライム路程を歩むのが信俊様であることが、神によって予定されている」の誤り

復帰摂理に現れた中心人物の歩んだ路程を、将来、来られるメシヤが歩む模擬路程、象徴路程として捉えるのは、正しい摂理観です。

ところが、李鎬宅氏は、ヤコブ路程やヨセフ路程をメシヤに当てはめるのみならず、それを真の子女様にも当てはめ、メシヤが歩んだ路程以降の摂理を、神が前もって子女様に対しても予定していると主張します。彼は、アブラハム、イサク、ヤコブ路程を歩むのが真のお父様であり、亨進様はヤコブ路程の続きであるエジプトで歩んだヨセフ路程を歩むと説きますが、これは誤りです。

『原理講論』は、ヨセフ路程について次のように述べています。

「彼（ヨセフ）が三十歳になりエジプトの総理大臣になったのち……兄たちと父母とがエジプトを訪ねてきて彼に屈伏した……。ヨセフのこのような路程

は、将来イエスが来られて、苦難の道を通じて、三十歳で王の王としてサタン世界に君臨されたのち、全人類はいうまでもなく、その祖先たちまでも屈伏させ、サタンの世界から分立して天の側に復帰するといふことを、見せてくださったのである。このようなヨセフの全生涯は、とりもおさず、イエスの模擬者としての道を行く歩みであった」(二五二〜二五三ページ)

ヤコブ路程もヨセフ路程も、どちらもメシヤであるイエス様が歩む模擬路程であって、ヤコブ路程をイエス様が歩み、その後、イエス様の相続者がヨセフ路程を歩むというわけではありません。アブラハム、イサク、ヤコブ、さらにヨセフも、彼ら全員が歩み、将来、来られるメシヤが歩む道を準備するための模擬路程、象徴路程であること知らなければなりません。
 ところで、真のお父様は、第

二次世界大戦後、キリスト教の不信によって苦難の道を歩まれました。しかし二〇〇一年四月十八日、「米国五十州巡回講演」において米国牧師が真の父母様と一つになった勝利基準が立つたとき、お父様は、再臨主の行く道について次のように語られました。

「偽りの父母から血肉を受け継ぐことによって、亡国の環境となつてしまったサタン世界の霊界と肉界を、どのように修理するのかということ。それは、修理すべき責任を持った真の父母」という人が来て、神様のように数千年間かけて役事するではありません。アダムが一代で完成することができなかつたので、(先生)一代で解決しなければなりません。ですから、それは、どれほど途方もないことでしょうか?」(『ファミリー』二〇〇一年六月、九ページ)

「歴史を一代で解決しなければなりません。一代ですのです。分かりませんか? 何代ではありません。先生一代で解決しなければなりません。アダム家庭が、一代で勝利できなかったことを歴史的に総蕩滅して、先生一代で整備しなければならぬのですから、それが、どれほど途方もないことであるかということを考えてみてください」(同、一三二ページ)

真のお父様は、「アダムが一代で完成することができなかつたので、一代で解決しなければなりません」とはつきり語っておられます。

また、終末とは、『原理講論』に書かれているように、メシヤが地上に降臨されたときに起こる善悪交差の時です。それは、メシヤが降臨された「一点」において交差するのであって、何代かにわたって行われる摂理で

はありません。正に真のお父様が、「一代ですのです。分かりませんか? 何代ではありません」と明言しておられるとおりです。
 アブラハム、イサク、ヤコブの路程は、真のお父様が歩み、その続きであるヨセフ路程を亨進様が歩むという李鎬宅氏の摂理観は、完全な誤りであり、お父様のみ言および「原理」の内容に反するものです。

(2) 李鎬宅氏の言説「ヤコブが九十歳の時にヨセフがエジプトの総理大臣になったように、真のお父様は九十歳の時に、三十歳の亨進様を相続者として立てられた」の誤り

李鎬宅氏は、ヤコブが九十歳のとき、ヨセフが三十歳でエジプトの総理大臣になったように、お父様が九十歳のときに、三十歳の亨進様を相続者として立てられたと主張します。これは、

み言や聖書の年数に何の根拠も持たない誤った言説です。

聖書の創世記に記述された年数は、『原理講論』に「象徴的同時性の時代」と表現されているように、象徴的に現れた年数です。聖書（創世記）に書かれた年数をそのまま計算すると、象徴的同時性である百二十年、四十年、二十一年、四十年という数理的期間が出てきます。すなわち、アブラハムの召命からヤコブが祝福を受けるまでが百二十年であり、ヤコブとエサウの対立期間が四十年。ヤコブがハラシに行く苦役する期間が二十一年、ヤコブがカナンに帰った後、エジプトに行くまでが四十年になります。

聖書に出てくる年数によれば、ヤコブが九十一歳のとき、ヨセフが生まれ、さらにヤコブが九十七歳のとき、カナンの地に帰還し、ヤコブが百三十歳のとき、エジプトに移住して百四十七歳のときに亡くなった計算になり

ます。
ところが、真のお父様は、ヤコブが二十一年間のハラシ苦役路程を終え、カナンの地に帰還して兄エサウを屈伏させ、実体基台を勝利した実際の年齢は、四十歳であったと語っておられるのです。

「二十一年が過ぎて、ヤコブが家に帰って来たとき……エデンの園におけるカインとアベルの関係を、ヤコブは兄エサウとの関係において、勝利しました。……ヤコブが長子権を獲得したのは、四十歳の時でした」(『フアミリー』一九九六年六月号、三七ページ)

このことで分かるように、聖書の年数は、あくまでも摂理的同時性に基づいて歴史が導かれていることを人類に教示するために記された象徴的数字です。
ヨセフは、ヤコブが二十一年のハラシ苦役をしている時に生

まれた息子であるため、実際の年齢で言えば、六十歳で生んだということはありません。それにもかかわらず、李鎬宅氏は、ヤコブが六十歳のとき、ヨセフが生まれたのと同様に、真のお父様が六十歳のとき、亨進様が生まれたと語っています。また、聖書に出てくる象徴的数字で計算しても、ヤコブが九十一歳のとき、ヨセフが生まれた計算となります。

結局、真のお父様のみ言から見ても、聖書に書かれた年数から見ても、李鎬宅氏の言説は、でたらめであるという事実が分かります。

当然、李鎬宅氏が主張する「ヤコブが九十歳のときにヨセフがエジプトの総理大臣になったように、真のお父様は九十歳のときに、三十歳の亨進様を相続者として立てられた」という言説は、み言や聖書に根拠のない誤りです。

(3) 李鎬宅氏の言説「ヨハネの黙示録の二章を見ると、真のお父様が九十三歳で聖和されることが預言されている」の誤り

李鎬宅氏は、ヨハネの黙示録を恣意的に解釈し、ヨハネの黙示録一章に、真のお父様が九十三歳で聖和することが預言されているとします。すなわち彼は、お父様が二〇〇九年の九十歳で、三十歳の亨進様を相続者として立てたので、そこから三年半の期間である四十二年か月を数えた九十三歳で聖和することになったのだとします。

しかし、『原理講論』は、李鎬宅氏が引用している黙示録一章二節の直前にある黙示録一章11節「あなたは、もう一度多くの民族、国民、国語、王たちについて、預言せねばならない」という聖句を、再臨主が「原理」を説明して発表されることとして解釈しています(参

照、一七二ページ)。

また『原理講論』は、李鎬宅氏が引用する直後の黙示録一章15節「この世の国は、われらの主とそのキリストとの国となった」を、キリストの顕現として解釈しています(参照、四九〇ページ)。したがって、李鎬宅氏のように黙示録一章二節を預言する聖句として解釈するには無理があり、その預言は、むしろ再臨主が迫害され「苦難の道」を歩むが、それを乗り越えて勝利されることを意味する聖句として解釈することか、『原理講論』の解釈および摂理観と一致すると言えます。

また、黙示録一九章に「小羊の婚宴」が記述されていますが、真のお父様は「アダムとエバがエデンの園で夫婦になることができなかつたことを、歴史時代を通して克服し……真の父母を再現するその祝宴が『小羊の婚宴』です」(八大教材・教本『天

聖經』二二九二ページ)と語っておられ、それが一九六〇年の「聖婚式」を示すものとして解釈できます。

李鎬宅氏は、黙示録一章二節からの聖句を「聖和」の預言だとしますが、その後の黙示録一九章に一九六〇年の「小羊の婚宴」を預言する聖句がある事実を考察すると、彼の解釈は、聖和と聖婚式を逆転させた、つじつまの合わない解釈であると

言わざるをえません。
(4) 李鎬宅氏の言説「清平役事が一九九五年から出発したが、そのときから統一教会は発展するのではなく、滅びていくようになった」の誤り

李鎬宅氏は、「三十六万双の祝福式が行われた一九九五年が、統一教会が最も発展したピークの時であり、それ以降、統一教会は発展するのではなく、滅びていくようになった。その一九

九五年は、清平役事が始まった年である。清平役事は決して良かったとは言えない」と、清平に対して批判的に述べます。しかし、清平を聖地として定められたのは真のお父様です。お父様は、一九六九年から清平で精誠条件を立てられ、清平に基盤を築いていく歩みをされました。その清平に対し、次のように語っておられます。

「清平の地は、世界の祖国の地、全人類の心情的故郷の地にならなければなりません。天地が仰ぎ得る勝利的創造理想を完成させ、天地が連結されて神様の心情を解怨成就できる地になるだけでなく、世界の故郷の地になり得る神聖な土地になることを祈ってきたのですが、これが本格的に出発できる時点で達しました。……今、世界百八十五カ国に私たちの基地がありますが、父母様の願いは、ここ(清平)をその百八十五カ国

のあらゆる歴史的伝統を展示できる歴史的な基地にすることで。それだけでなく、この基地で……天との関係をどのように結ぶかを教える修練所、教育場所を用意するのです。そのようにするために準備した土地として祈っていたことが、そのまま歴史的な事実として連結され得るようになりました。このような世界版図を統一教会がもつたことは、驚くべき勝利の結果であると考えているのです」(『真の父母經』四二九ページ)

真のお父様は、清平を「創造理想を完成させ、神様の心情を解怨成就できる地」「世界の故郷の地」「天との関係をどのように結ぶかを教える修練所、教育場所」として準備したと語っておられます。そして、真の父母様と米国牧師が一つになった基準を立てたとき、お父様は次のように語られました。

「摂理史を知らなければなりません。……一代でこれを合わせなければなりません。皆さん、今(二〇〇一年)から十二年残っています。皆さんの国を復帰しなければなりません。……ですから、先生は八十歳になるときまで、どれほど忙しかつたでしょう。統一教会は、九七年、八年から上がり始めたのです」(『フアミリー』二〇〇一年六月号、二〇ページ)

真のお父様は、統一教会は一九九七年、九八年から上がり始めたと言明しておられます。
真のお父様の認識と、「清平役事が一九九五年から出発したが、そのときから統一教会は発展するのではなく、滅びていくようになった」と語る李鎬宅氏の認識は、大きく掛け離れたものであり、一致していません。彼の説く摂理観は、お父様のみ言に根拠を持たない誤った言説であると「言わざるをえません」。